

真剣で俺に恋しなさい
!!!!

丸太

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

父親を武道家として持つ小野寺 鷹という少年のお話。

ある日、自身不在中に両親が殺され父方におじ、おばに引き取られる。

父方の地域の学校である川神学園に二年生として入学。

そこで鷹の運命は大きく変わっていく…

目次

プロローグ	1
第一話 歩み	6

プロローグ

それは、ある日突然やってきた、そんな日は来ないと思っていた…

道場で血を流している両親を亡きがらを見ながらそんなことをおもっていた…

あの日もこんな雨の日だっただろうか、雨が降っている夜空を電車の中から見つめながら思った、あの日から何日もたっていないだろうが自分にはもう何年もたってしまったように感じる。

父方のおじの家は関東の南に位置する政令指定都市川神市。

田舎者からいきなり都会人へ、いろいろな不安もあつたがなんとか川神駅へ到着。

コンビニで買った傘をさしそのままおじの家へ…

「おお、よかったですねえ〜」

「ただいま…で、いいのかな」

満面の笑みで迎えてくれるおばに対して苦笑いで答えた。

「もちろん、ここが鷹の家なんだからね」

「ああ…」

お婆の言葉が優しい、今はそれだけでむねがいつぱいだつた。
すると奥から

「おおおお、久しぶりじゃな！孫よ！」

「じいちゃん…あいからわず元気だな」

もう80も近いおじだが20代みたいに元気だつた。

今でも毎日の鍛錬は欠かしていないらしい。

「とりあえず、今日からよろしくな、じいちゃん、ばあちゃん」

「こまつたことがあつたら何でもいうんだよ？」

「ああ」

「おーし、じゃあわしと組み手でもやるか！孫よ！」

「これ！爺さん！」

「あはは、今日はいいよまた今度しようぜじいさん」

「むう…そうか…じいさんはさびしいぞ…」

がつくりと肩を落とすおじ、なんだかわるいことをした気分だ…

「とりあえず今日はもう休むよ」

「そうね、お布団準備しましょう」

「じいさん無視!」

「そういえば、お夕飯はもういいの?」

「ああ、電車の中で食べてきた」

「そうかい、じゃあ歯磨きしておいで」

「ん」

「……」

じいさんが泣き出しそうだったがスルーした。

その日は明日の学校の準備してそのまま寝た。

「おはよう、ばあちゃん」

「はい、おはよう、朝食できてるから一緒にたべましょ」

「ん」

いつもと違う朝、妙に体がけだるかった。

「今朝は良く眠れたかい？」

「ああ、よく眠れた」

「そうかい、よかったよかった、一人じゃ寝られないんじゃないかと心配したよ」

「ばあちゃん…俺何歳だとおもってるの…」

「ばあさんにとつちや孫は何歳になってもかわい子孫だよ」

満面の笑みで答えるお婆はとても楽しそうだ、するとお婆の顔が急に暗くなった、
「実際ね…とても心配だったよ、これから鷹はどうなってしまうんだろうかってね」

「…もう大丈夫だよ、親父と母さんためにもいつまでもうじうじしてられないしね」

「そうかい…でも、こまったときはいつでもいうんだよ」

「ありがとう…ばあちゃん」

お婆は誰にでも優しい、孫には特に優しくかった。

顔を洗った後食卓に着く

「あれ？じいちゃんは？」

「いつもの日課だよ」

「元気だな」

「おかげさまでね」

そんなこんなしているうちに時間になりいつきにご飯をかつこんだ後、鞆をもち学校へ行く準備をする。

「いろいろあると思うけど、楽しんでおいで、学校生活なんて人生に一回しかないんだからね。」

「うん、ばあちゃんがいうと説得力あるな」

笑いながら答えた。

「それじゃいつてきまーす」

「はい、いつてらっしやい」

お婆の声を聞きながら学園のほうへ歩き出していった。

第一話 歩み

朝の妙なけだるさはどこかに消え、すがすがしい朝の風をあびながら大きな橋にさしかかった、すると土手のほうで人が集まっているのが目に入った。

「ん？なんだあれ」

よく見ると長い髪の女の人が次々と不良のような輩を台風のように飛ばすたびに黄色い歓声が飛び交っている。

「なんだあれ…」

なにがおこっているのかさっぱりだった

「と、とりあえず俺は学校にいかない」と

多少の疑問を抱えながらその場を後にしようとしたところ

「ぎゃーーーーー！！」

ガン!!

女の子が飛ばしてきた不良が頭に当たった…痛い…

「痛た…大丈夫か？」

自分とはともかく、あそこから飛ばされてきた不良が心配で声をかける、

「あばばばば！助けてくれ！もう何もしない！」

「ちよつと落ち着けよ…なあお前たちが戦っている女の子は何者なんだ」

「たつたしか川神百代といった！それ以外は知らない！」

「川神か…」

ん？：そういやこれからいく学校も川神学園だったよな…学園長の娘さんかな？

「ま、いいかとりあえず立てるか？」

「ひいひい！許してくれ！」

トラウマものなのだろう…

その後、不良に誤解をとき学校へ急いだ、自分は転入生ということでもまずは学園長のところへ挨拶に行くことになっている。

「うわつでっけー!!さすが都会だな！テンションあがってきた！」

「しかし…学園長と聞くと忍たまを思い出したのは俺だけだろう」

無駄なことを思いつき学園長のところへ急ぐ

「とつここだな、さすがに転校初日に遅刻は恥ずかしいからな…」

扉の前に立ちノックする

「んんんん

「はいってよいぞ」

「失礼します」

扉を開けるとそこにはひげを足まで伸ばした老人がいた、ちやうど打ちの爺さんと同じぐらいかな？

「君が鷹君か話は君のおじから聞いておるぞ、早速じゃが君のクラスはFとなつておる、何か質問はあるかの？」

「はあ、そういえばあの橋の土手のほうで女の子が暴れまわっていたんですが、むすめさんですか？」

「おお、もう孫娘にあつたのかの？」

「遠目でですけどね、すごい人ですね…」

「ほっほっほ、そうじゃろそうじゃろ自慢の孫娘じゃよ…君もなかなかだと思ふんじやがな」

「気のせいですよ」

「そうかのく？そういえば小野寺流派はかなり特殊だときいたんじやが？」

「普通の武道家から見たらそうでしょうね、何しろほとんどが漫画やゲーム技なんですから」

「漫画やゲームのわざを使えるだけですごいと思うがの…」

「それはそうともうそろそろHRじゃないですかね」

「おおっ本当じゃ、梅先生は入ってきてくれ」

「はい！」

すると綺麗な人が入ってきた。

「それではよろしくたのんじやぞ」

「はい、それでは小野寺いくぞ」

「了解です」

「……」

「どうしました？」

「返事は…はいだ！」

ピシヤ!!

「いたあああ!!」

「わかったな？」

「は、はい…」

「うむ、ではいくぞ」

都会では鞭で教育するのか…初めて知った…

「それでは呼ばれたら入ってくるようになるよ小野寺」

「はい…」

Fクラスの扉の前で待つことになった

「それでは入って来い」

「はい」

教室に入り壇上に立つ

「え〜本日転校してきました小野寺 鷹です、趣味は漫画集め、あと武道をすこしやって
います、どうぞよろしく!!」

「だそうだ、何か質問はあるか? 節度のある質問をな」

「はいはいはーい!!」

元気なポニーテールの女の子がいきよいよく手をあげた

「うむ、川神なんだ？」

「小野寺君は武道を習っているのよね、ぜひとも今戦いたいわ!!」

クラスの皆がはやし立てる、すると

「おい犬！いきなり失礼だろ」

「なによクリ、別にいいでしょ、さあ小野寺君、校庭に出て勝負よ！」

「ふむ、そうだな早く学園に慣れるためにも必要かも知れん、学長には私が申請しておこう」

ああなるほどバトルか、前の学校でもバトルを遊びとしてやっていたからなんとなくわかる、つまり川神さんは俺が

早くクラスなじめるように誘ってきてくれるのか…ええ子や

「よし、やろうか川神さん！」

「おお、乗る気満々ね、それじゃ校庭まで競争よ！　　よゝい…どんん！」

「どんん!!」

二人して教室から飛び出した、すると教室から

「おいおいワン子のやついつちまったぞ」

「でも大丈夫そうじゃない？あの転校生なんだか弱そうだったよ？」

「たしかになくなんだからよわっちく見えたな」

小柄な男と筋肉男が話し合っている

「ほら岳人、モロいくぞ」

「まったくしょもない」

「おうそれじゃあ行くか軍師と京さんよにしてもキャップがいれば面白くなつたんだがな」

「まあ、いないもんはしょうがないな皆いくぞ」

そうして学校中の生徒が校庭に集まっていった